

ルカによる福音書13章24節 「狭い門から入る」

1A 救いに必要な努力

1B 行いによらない救い

2B 熱心に聞く努め

2A 狭い門

1B 神を知らないとする弁解

2B 他人を裁く過ち

3B 聖書の知識という妨げ

4B 十字架に付けられる肉欲

3A 入ろうと思っても入れない門

1B 二度目の機会

1C 増し加わる罪への恵み

2C 残されていない救しの備え

2B 「主を知らない」という悲劇

本文

ルカによる福音書13章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは12章まで来ましたが、午後礼拝で13章を一節ずつ見ていきます。今朝、注目したい箇所は24節です。「**狭い門から入るように努めなさい。あなたがたに言いますが、多くの人が、入ろうとしても入れなくなるからです。**」

このイエス様の言葉は、イエス様についてきている群衆の中の一人が、「13:23 主よ、救われる人は少ないのですか。」と尋ねたことに対する回答でした。私たちはこれまで、群衆がイエス様のところに押し寄せていることについて、主ご自身は、かなり距離を取って、警戒している言葉を語っておられました。相続の分与に対する言葉は、貪欲に気を付けなさいと言われました。富を蓄えても、一夜にして魂を失ったら何の意味もないことを語られました。天の徴は求めても、時の徴を自分で判断できない、そしてあなた自身が裁判の被告席に立つ時が来る、その前に和解しなさいとも言われました。そして、13章に入ると、ガリラヤ人がピラトによって殺されましたが、あなたも悔い改めないならそのように滅びるとはっきりと語られ、実を結ばないいちじくの木を切り倒そうとされる神の姿も、イエス様は語られています。ずっと付いてきている群衆の中に、これらの言葉から、「どうやら救われる人は、少ないのだろうか」と疑問に思った人が出てきた、ということです。

1A 救いに必要な努力

ユダヤ人の教師たちは、イスラエルは終わりの日に救われることを、聖書に従って教えていました。教師によって、それが広く開かれた門であるのか、狭まれた門であるのかは意見が別れてい

ました。ある教師は、アブラハム、イサク、ヤコブの血縁の子孫であれば、みな神の国に入ることができると教えていました。またある教師は、残された者だけが入ることができると教えていました。イエス様は、そのどちらでもなかったのです。「狭い門から入るように努めなさい。」と言われていました。ここはかなり強い命令になっていて、「あなた方が努めなさい」と、「あなた方が」という意味合いが入っています。一般のユダヤ人が、ユダヤ教のラビから聞いていた時、抜けていた点は、あたかも人々が自動的に救われるように考えていたことなのです。全ての人々が救われるにしても、僅かな人が救われるにしても、それを当事者意識なしで考えていたために、あたかも、何もなくても自動的に救われると思っていました。

私たちキリスト者が覚えていなければいけないのは、私たちは信仰によって、ユダヤ人への神の選びに接ぎ木されているということです。ユダヤ人に起こっていることはユダヤ人で、我々異邦人のキリスト者には無縁だと考えたら大間違いです。ここにあるユダヤ人たちの問題は、まさに信仰によって、アブラハムの子孫になった私たちにも直接、関係する言葉です。

つまり、「だれが救われているのか、救われていないのか」という議論を私は、クリスチャンたちからたくさん聞きました。ここで私が非常に疑問に思うのは、「天国や地獄というものは、もっぱら神の領域であり、神が裁かれることだ」ということです。「伝道 12:7 土のちりは元あったように地に帰り、霊はこれを与えた神に帰る。」その霊が、滅びのために地獄に閉じ込められるのか、あるいはアブラハムの懐で慰めを受け、天に迎え入れられるのか、どちらもしても、神のもとに帰るのです。神が、私たち一人一人の命について支配し、裁かれるのですから、私たちは神を見上げて、神の臨在を覚え、神を感じ、神にお任せするのであり、人間がとやかく言ったところで、何かが変わるわけではありません。問題は、「あなた方が狭い門から入りなさい」と主が言われていることです。自分自身が、救われているのかを確かめることです。ペテロが第二の手紙で言いました、「1:10 ですから、兄弟たち。自分たちの召しと選びを確かなものとするように、いっそう励みなさい。」パウロもこう言いました、「Ⅱコリ 12:5 あなたがたは、信仰に生きているかどうか、自分自身を試し、吟味しなさい。」

1B 行いによらない救い

そしてここで、イエス様は、「努めなさい。」と言われていることに注目してください。この「努める」という言葉は、ἀγωνίζομαι (agonizomai アゴニゾマイ) という言葉で、英語の agonize という言葉も、このギリシア語から来ています。「悶え苦しむ」という意味合いさえあります。事実、イエス様がゲッセマネの園で祈られた時に、「22:44 苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。」と言われた、苦しみ悶えも同じ言葉が使われているのです。これは、ちょうど運動選手が激しい訓練を自分に課し、賞を得るといった目標のために、あらゆる努力をしている姿を表しています。

けれども、「あれっ、救われるのは信仰によるのであって、行いによるのではないですね？」と疑

間に思われたかもしれません。そうです、「エペ 2:8 この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。」とあります。ここの努めるとは、行いによる救いを教えておられるのとは別や、いや正反対のことを語られています。「行いによっては、全く救われないのだよ」ということを、認めるところの苦悩です。自分には良いものが全くない、ゆえに救いをイエスご自身に求め、この方を見つめるというところにある苦悩です。

金持ちの青年のことを思い出してください、彼はイエス様に「何をしたら、私は永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか。」と尋ねました。イエス様は、十戒のうち、「姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽りの証言をしてはならない。あなたの父と母を敬え。」をあなたは知っているはずだと言われたら、「少年のころから、それらすべてを守ってきました。」と答えるのです。これはすごいです、かなりの品行方正です。ところが、「まだ一つ、あなたに欠けていることがあります。あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つこととなります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」と言われました。それで、彼は非常に悲しんで、その場を去って行ったのです(ルカ 18:18-23)。彼はどんなにか、良い行いをして救われようとしたことか。けれども、金銭が彼にとっての安心となり、神とさえなっていました。彼に必要だったのは、そういった貧しくされた心をもってイエス様を見上げることでありました、「私は、罪人です。どうか、憐れんでください。」と請い願うべきでした。しかし、自分自身に正直になれませんでした。自分自身を欺いていました、人格の核となっている部分に誰をも、神をも触れさせないという、頑なな心、そして高慢がありました。イエス様が語られている「努めるとは、こういった自分自身にあるものとの葛藤や苦悩をも含むのです。

2B 熱心に聞く努め

「信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。」と、ローマ 10 章 17 節にあります。けれども、その「聞く」という行為を私たちは、どれほど真剣に行なっているか？ということです。しばしばお話しする例えは、離陸する時の飛行機の中での安全のガイドラインのアナウンスです。多くの人が聞き流しているだけです。けれども、実際に乱気流の中で飛行機が大きく揺れ、客室乗務員が指示を出す時は、その一言一言を食らいつくように聞きます。なぜなら、その言葉が自分を救うことを知っているからです。箴言 2 章にこう書いています、「2:1-5 わが子よ。もしあなたが私のことばを受け入れ、私の命令をあなたのうちに蓄え、あなたの耳を知恵に傾け、心を英知に向けるなら、もしあなたが悟りに呼びかけ、英知に向かって声をあげ、銀のように、これを探し、隠された宝のように探り出すなら、そのとき、あなたは【主】を恐れることをわきまえ知り、神を知ることを見出すようになる。」しっかりと聞き、自分で判断し、このようにして探り出すならば、主を恐れ、神を知ることができると約束されています。

2A 狭い門

イエス様は、救いへの道は狭い門であることを語られました。それは結論から言いますと、「キリ

ストが私たちの罪のために十字架の上で死なれた」ということよってのみ、初めて救われるという狭い道だということです。

1B 神を知らないとする弁解

パウロは、ローマ人への手紙で、神の怒りが真理を阻んでいる人々に啓示されていると語りました(1:18)。天地を造られた神の栄光を偶像に取り替えて、あらゆる不義や不正を貪っている人々に対して語りました。彼らの弁解は、「神を知らないから」というものでした。異教徒のことです。ローマ社会にいる、ユダヤ教やキリスト教とは無縁の人々のことです。聞いたことがないのだから、裁かれるわけがないだろう、という弁解に対して、いいえ、「1:20 神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。」と言いました。そして、あらゆる悪、不義を行っていたら、「1:32 死に値するという神の定めを知りながら、自らそれを行っているだけでなく、それを行う者たちに同意しているのです。」と言っています。何も教えられているわけでもないのに、暗闇で行っていることを明るみに出されないようにして、そういったことを行っています。それは悪であり、悪には神の怒りが下るということ、神について全く教えられていなくても、知っているというのです。

2B 他人を裁く過ち

けれども、そういったことをしていない人々に同罪だとパウロは論じます、弁解の余地はないと断じます。そういった人々を見下げている人々、他人のことについては論評できるけれども、自分自身を顧みていません。「2:1 あなたは他人をさばくことで、自分自身にさばきを下しています。さばくあなたが同じことを行っているからです。」私が信仰を持つきっかけになった本が、三浦綾子さんの「光あるうちに」でした。そこに、正確な引用ではないですが、婦人たちの井戸端会議の会話があります。近所の人の不倫をしていました。「なんと、汚れていること」というような、非常に汚れたことをしているとして噂します。けれども、その舌の根も乾かぬうちに、自分自身が若い男と通じました。「恋はこんなにすばらしいものなのね」と語っているというのです。そう、ちょっと環境を変えれば、自分自身が全く同じことをしている、あるいは心の中では同意しているのです。それにも拘らず、自分自身は正しいのだとして頑なになっているところに、神の怒りが積み上げられているのだとパウロは論じています。

3B 聖書の知識という妨げ

そしてパウロは、聖書の知識さえが、救いの知識の妨げになることも話しているのです。「神を知るためには、聖書を徹底的に読むべきだ」ということを言っている人が最近、いました。それは半分当たっていて、半分、間違っています。なぜなら、聖書を徹底的に読んでいたのは、まさしくユダヤ人の教師たちだったのですが、彼らこそがイエス様を妬み、十字架に付けるように仕向けたのです。パウロはこう論じています、「2:21-23 どうして、他人を教えながら、自分自身を教えないのですか。盗むなど説きながら、自分は盗むのですか。姦淫するなど言いながら、自分は姦淫す

のですか。偶像を忌み嫌いながら、神殿の物をかすめ取るのですか。律法を誇りとするあなたは、律法に違反することで、神を侮っているのです。」

4B 十字架に付けられる肉欲

「ええっ？正しく生きようとしても、他人を裁いていて、聖書の知識があっても知っているだけで、行っていないとしたら、何をやっても救われないじゃないですか？」と思われるかもしれません。はい、何をやっても救われないのです！これが、パウロがローマ人への手紙の初めに論じたことだったのです。「3:9 ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下にあるからです。」「3:19 すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。」

それで初めて、イエス様がなぜして、十字架の上で、「神よ、神よ、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」と言われた意味が分かります。私たちがそこにいなかえればいけなかったのです。けれども、イエス様が身代わりに、神のさばきに服してくださることによって、私たちの罪がキリストの上に、そしてキリストの義が私たちの上に置かれるためなのです。ですから、十字架というのは、私たちのあらゆる罪悪、肉欲のすべてが釘づけにされたところであります。「ガラ 5:24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、情欲や欲望とともに十字架につけたのです。」

3A 入ろうと思っても入れない門

そして、主は、「あなたがたに言いますが、多くの方が、入ろうとしても入れなくなるからです。」と言われました。これは続けて、25 節にありますが、こう言われています。「家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってから、あなたがたが外に立って戸をたたき始め、『ご主人様、開けてください』と言っても、主人は、『おまえたちがどこの者か、私は知らない』と答えるでしょう。」ちょうどノアの箱舟の時に、箱舟の戸が閉じられて、雨が降ってきたけれども、その後で戸が開かれることがなかったように、主が再臨されて、その裁きから免れようとしても、決してできないことを話しています。多くの方が入ろうとしても、決して入れなくなるのだ、ということです。

1B 二度目の機会

1C 増し加わる罪への恵み

ここで気を付けなければいけないことがあります。こう言った箇所を読むと、ある人々は、「私は入れなくなるかもしれない」と思うことです。自分とはんでもない罪を犯していて、このままであれば入ることができないのだ、ということです。しかし、もしその罪の自覚があるのであれば、保証します。主は、その罪のためにも死んでくださり、豊かに赦してくださるよう既にしておられるということです。「5:20 罪の増し加わるところに、恵みも満ちあふれました。」どんな恐ろしい罪でも、人の子を冒瀆する罪でさえ、赦されるとイエス様は言われましたが、それでも神の恵みはそれらの罪を赦すほどに豊かに注がれているのです。ですから、勇気を出して罪を告白し、悔い改めてください。主は必ずその罪も赦して下さいます。そして、そうした神の恵み深さを知ることになり、知れば知

るほど、自分が罪の中に生きることがあほらしくなってきて、イエス様のすばらしさの中で生きたいと願います。こうして、恵みによって成長し、聖潔の中で生きることができるようになります。

2C 残されていない救いの備え

けれども、「罪が赦されるのであれば、罪を犯したままでいいではないか。罪の中に生きていても大丈夫だ。」とする人に対しては、まさに、このイエス様の言葉が当てはまります。主が再び戻られて裁かれる時に、救いの機会は全くないのだということです。恵みの期間、救いの時は定められていて、その時が過ぎれば、救いの機会は二度と来ないのだということです。「ヘブ 9:27 人間には、一度、死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」とあります。死んだ後に、悔い改めて、それで救われようとすることはできないのだということです。

金持ちとラザロの話にも出てきていますね。また教会の携拳の後に地上に大きな災いが下りますが、獣の国で刻印を押された者たちにも救いの可能性はありません。ここで気を付けたいのは、そういった人たちが本当に悔い改めの心を持つことができるのか？ということです。ハデスの火の中で悶え苦しんでいる金持ちは、激しく後悔はしているけれども、悔い改めていません。自分の心にあるプライドはしっかり残ったままで、悔いています。イエス様は、「歯ざしりする」という言葉を使われていますが、これは、悔しくてたまらないで、激しく憎んでいる、怒っているというような意味合いです。大患難の時に、その苦しみを受けている者たちは、「悔い改めなかった」とはっきりと書いてあります(黙 9:21)。それどころか、獣の国に生きている者たちは、激しい苦しみを受けて「黙 16:9 神の御名を冒瀆した。彼らが悔い改めて神に栄光を帰することはなかった。」とあります。悔い改めない人は、黙ってしまいますが、あのカインのように、心には怒りがたまって、主が優しく罪を捨てるように問いかけても、それでも捨てずに憎しみを増し加えていだけになってしまうのです。

ですから、主の恵みの時が終われば、その後には救いの備えはもはやないということです。「ヘブ 10:26-27 もし私たちが、真理の知識を受けた後、進んで罪にとどまり続けるなら、もはや罪のきよめのためにはいけにえは残されておらず、ただ、さばきと、逆らう者たちを焼き尽くす激しい火を、恐れながら待つしかありません。」

2B 「主を知らない」という悲劇

今、読んだ 25 節のところで「おまえたちがどこの者か、私は知らない」とあるのが、悲劇ですね。群衆は、イエス様のところには物理的にいました。そしてこの方の教えも聞いていました。けれども、この方については知っていても、この方ご自身を知ってはいなかったのです。私たちは、しばしば自分をだましてしまいます。主を知っていると言いながら、例えば兄弟を憎んでいるなら、偽りを言っているとヨハネ第一にあります(2:4 参照)。その行いが、神を知らないことを現わしてしまっています。間違ったところに、救いの保証を求めてはいけません。

「5:19-24 肉のわざは明らかです。すなわち、淫らな行い、汚れ、好色、20 偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、21 ねたみ、泥酔、遊興、そういった類のもので、以前にも言ったように、今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。このようなことをしている者たちは神の国を相続できません。22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、23 柔和、自制です。このようなものに反対する律法はありません。24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、情欲や欲望とともに十字架につけたのです。」ガラテヤ地方においても、ローマにおけるどの社会においても、ここに書かれている淫らな行い、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術などは、当たり前に行なわれていました。私たちの生きている社会で当たり前に行なわれていて、それらを行っていても、それでも大丈夫だと思っている時には、神の国を相続できないのだということに予め知っておく必要があるということです。また、敵意や争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、妬みなど、これらはガラテヤの教会に入り込んだ、ユダヤ主義、律法主義によるものでしょう。これらの肉の行いは厄介で、自分は正しいとしていますから、過ちに気づけません。こういった者たちも、御国を相続できないのです。

けれども、御霊によることは明らかであり、ここに並べられている特徴がある時は、それは明確に、律法にもかかっていることであり、神の御心にあるのです。ですから、答えは一つです。十字架のところに行くことです。周囲の異教的な行いに自分がいたとしても、律法主義的になって高慢になっていても、どちらにしても、十字架のところに行くのです。ここにあらゆる、肉の欲望が釘つけにされました。イエス様の流された血は、全ての罪を洗い清めてくださいます。